

第二百七十一話 指揮官の機に投じた決断こそ
昨年末(2021/12/11)産経新聞に「ユダヤ難民救った樋口中将 北海道に銅像建立へ実行委設立」なる記事が掲載された。

(<https://www.sankei.com/article/20211211-PFGXURMCDBKCA7GYMQAUWHDJA/>)

樋口季一郎中将に関連したメモランダムは、7話「杉原千畝だけではないユダヤ人への人道的対応」、176話「守備部隊の敢闘が北海道を守った！」

1 7話関連要約

樋口中将はハルビン特務機関長だった昭和13(1938)年、ナチスの迫害を受け、上海に亡命を目指しながら旧ソ連と満州国境で立ち往生していたユダヤ難民を満州国に受け入れて救済した。その数は2万人におよぶとも言われており、人道主義が国際的に評価されている。

スターリンは、樋口を「戦犯」に指名した。世界中のユダヤ人コミュニティの活動や、在欧米のユダヤ人金融家によるロビー活動が始まり、世界的な規模で樋口救済運動が展開された。その結果、日本占領統治を主導していた連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)のマッカーサーはソ連からの引き渡し要求を拒否、樋口の身柄を保護した。



2 樋口第5方面軍司令官の決断

樋口季一郎(士21期、中将)は、1942/8/1、北部軍(のち北方軍、第5方面軍と改称、HQは札幌)司令官として着任。

(1) キスカ島撤退作戦(48話 パーフェクトゲームと称賛されたキスカ島撤退作戦)

樋口指揮下のアッツ島守備部隊は、日本軍最初の玉砕(1943/5/29)したものの、48話で記した通りキスカ島撤退作戦(6/28発動 8/1終了)は成功した。

本作戦成功は、第一水雷隊司令官木村海軍少将の反転帰投、樋口司令官の兵器海中投棄の決断に負うところ大である。

海軍側からの要請に応じ、陸軍中央の決裁を仰がずに自らの一存で「救援艦隊がキスカに入港し、大発動艇に乗って陸を離れ次第、兵員は携行する小銃を全て海中投棄すべし」という旨をキスカ島守備隊に命じ、収容時間を短縮させ、無血撤退の成功に貢献した。後に問題とされたものの罪に問われなかった。

(2) 占守島守備部隊に「断固反撃、撃滅すべし」と

1945/8/9未明、ソ連は、ヤルタ密約により、日ソ中立条約を一方的に破棄して満州に侵攻した。8月15日終戦の詔書が渙発され、大本営は、同日「已むをえない自衛行動を除き、戦闘中止」を命令した。ところが18日深夜ソ連軍の砲撃が開始された。樋口は、独断で、堤第91師団長に「断固反撃に転じ、ソ連軍を撃滅すべし」と打電、現地軍は敢闘、ソ連軍を撃滅できる態勢となった。1600、日本軍は優勢のまま積極的戦闘を停止した。尚も攻撃続行するソ連軍との停戦交渉は難航し、21日やっと合意に達した。日本兵はシベリアに抑留された。この敢闘により、ソ連の侵攻作戦が遅れ北海道占領との野望は打ち砕かれたのである。

3 若干の観察

(1) 両作戦が成功したのは、上級指揮官と隷下部隊指揮官の信頼関係の賜物である。

(2) ソ連の本性をよく知る樋口ならではの決断だったとも云える。ソ連、ロシアは今も昔も全く同じだと言い切れる。ソ連の野望を阻んだ樋口を顕彰するのは道民のみならず日本国民として歓迎すべきことだ。銅像は、軍服姿であって欲しい。

(3) 機に投じる適切な決断こそ、指揮官に求められるものである。

(了)